

スポーツ系大学生におけるスマートフォン活用の現状と今後の展望

スポーツマネジメントゼミナール 1314032 佐野 正明

1. 研究動機・研究目的

2009年にスマートフォン（スマホ）が誕生してから10年ほどで、スマホの普及はデータ通信利用増の他にも幅広い分野での消費を促している。さらに、情報通信技術が発展したことで、多種多様なビッグデータの価値が高まっている。ビッグデータを活用することでスポーツと他の分野を組み合わせ、次々と新たなものが生まれる可能性が出てきた。また、2012年のロンドンオリンピックでは、ソーシャルオリンピックと呼ばれ、選手が自由にSNSで情報発信できるようなIOCのルール改正が行われた。さらに、日本では2020年東京オリンピック・パラリンピック大会を控え、益々スポーツに対する関心が高まっている。

そこで、日進月歩で進化するスマホやネット環境の中で、スポーツに関わる学生はその牽引となっているスマホに対して、今後、どのような機能を求めているのだろうか。この点に興味を持ち、この視点で研究を行うことで、大学スポーツの現場で、今どのような、スマホの機能やアプリのニーズがあるのか。本研究の目的は、今後の日本のスポーツとスマホをはじめとするデバイスとのかかわりを明らかにすることであった。

2. 研究方法

1) 調査対象者

本研究の調査対象者は、J大学在学中のスポーツ健康科学部、1年生、2年生、3年生、4年生の運動部活動に所属する学生であった。

2) 調査方法

本研究はグーグルフォームで作成したWebアンケート調査を行った。調査期間は、2017年7月から9月であった。アンケート調査は、部活動単位でアンケート調査への依頼を行い、各自でスマートフォンにより回答を行った。回収数は、245件であった。

3) 質問項目

本研究の質問項目は、1)個人的属性、2)スポーツにおいて使用するアプリの種類、3)ビッグデータの認知度、4)練習記録の有無、5)チームの指導者の練習時のデータ使用の有無、6)ソーシャルオリンピックについて、7)スポーツにおける今後必要な情報、8)スマホにおける今後必要な機能についての7つであった。

4) 分析

本研究で回収したデータはSPSS version23を用い、クロス集計、 χ^2 検定を行った。

3. 主な結果と考察

1) ビッグデータ及びソーシャルオリンピックの認知度について

ビッグデータの認知度は全体的に低い割合を示した。しかし、学年ごとに偏りがあり、認知度に差が見られた。学年が上がるにつれてより専攻する講義の中で、認知していったと考えられる。ソーシャルオリンピックの認知度はビッグデータ同様低い割合を示した。その一方で学年ごとに認知度の違いは見られなかった。

2) 所属部活動ごとの使用するアプリについて

所属部活動ごとにおける使用しているアプリでは、Twitter や YouTube、カメラが高い割合を示した。より多く情報を手に入れることができ、一流選手の映像や、自分の映像が手に入ることが考えられる。一方で、Facebook が低い割合を示した。このことから Facebook は若者にはあまり普及していないことが考えられる。

3) 今後、期待される機能

所属部活動ごとの、今後のスマホに期待する機能としては、自分のパフォーマンス時の立体映像とポジション適性の数値化が高い割合を示した。これらは直接パフォーマンス向上や、勝因に直結するからだと考えられる。一方で、一流選手の立体映像は、YouTube など確認できると考えられることから、低い割合となったと推察される。

4. 結論

今回調査により、ビッグデータの認知度が低いことや、競技ごとに必要とされる情報や機能が明らかになった。ビッグデータやソーシャルオリンピックの価値が注目されており、一流のスポーツ選手やチームが活用し始めている中で、大学のスポーツの現場においてはあまり認知されていないという結果になった。しかしながら、今後はデータの活用がチームや個人の競技レベルを大きく向上させることが考えられることから、利用は増えることが予想される。また、商業的価値を十分に秘めたスポーツ界に対して、挑戦する企業が今後は現れるのではないかと思われる。さらに、それに後押しをされてスポーツをする人の多種多様なニーズが実現し、スマホ、時計などのウェアラブルデバイスの発達により、身体的に不利な日本人選手が活躍するチャンスが広がるのではないだろうか。今後のスポーツ界はより賢くデータを活用し、効率的なトレーニングを積んだ、選手やチームが勝つ傾向にあると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

今回の調査で、今スポーツの現場で必要とされている機能や、情報について、理解を深めることができた。その中で、一流の選手やチームと、大学生をはじめとするアマチュアとのトレーニングの取り組み方に溝を感じた。そこに今回の調査で得た物の価値が眠っているのではないかと感じた。アマチュアスポーツのレベルが上がることで、国全体のスポーツのレベルも価値も上がるのではないか。2020 年の東京オリンピック、パラリンピックに向けて、取り組むべき課題、スポーツの価値が明らかになったと感じた。

最後に、本研究のアンケートに協力してくださった学生の皆さん、及び小笠原悦子教授にお礼の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。